

第五講 風流

典型問題

〔9〕 次の文は平安時代の女流歌人、四條宮下野しもつけの家集の一部である。これを読んで後の間に答えよ。

隆綱たかづなの中將、「月の明き夜は、夜一夜なむ見る」とあるに、夜中ばかりに初雪は降りながら、月の明きがをかし。「^(イ)同じ心にあらむや」と思ふに、^(ロ)「見るとありし、まことか」と心みむとて

月をこそめづらし気なく思ふとも夜半の初雪ふると知らずや (A)

返し

雪ごとに待ちて過ぐさむ冬の夜の月には人も音せざりけり (B)

同じ中將、「雪のいみじう降りたらむ折、広き野の雪御覽ぜよ。いつなりとも車まゐらせたらむに、「何事にこそ」とも、また「暇いとまなく」とも仰せられれば、負くるにせむ」とあれば、「また降りたらむに、忘れて車賜はせずは、負くるに」など、かたみに言ひおきての

〔出典〕

『四條宮下野集』

〔出題校〕

○京都大

〔重要語句〕

○夜一夜

○をかし

○夜半

○音

○いみじ

○御覽ず

○まゐらす

○暇

○仰す

○賜はず

○かたみに

○あやにくなり

○里

○たまふ

○よし

○聞こゆ

○ほど

○文

○いつしかと

問三 和歌(B)について、「雪ごとに待」つものは何か、記せ。

--

問四 傍線部(ハ)の「あやにくに」の意味を現代語で記したうえで、なぜ「あやにく」なのか、述べよ。

--

問五 傍線部(ニ)のごとく作者は思ったというが、事実はどうだったと推測されるか、和歌(C)(D)を手がかりにして述べよ。

--